知多半島ケーブルネットワークコミュニティ誌［ココナッツクラブ］

COCONUTS CLUB

JULY 2018 7

丘の上の南知多

丘の上の南知多

海のイメージが強い南知多だが
内陸部に広がる丘陵地にも、この地域ならではの興味深い話題がいくつもある。
今回は丘の上だけにスポットを当て
知っているようで知らない観光、農業、工業の歴史を紐解いてみる。

楽園オン・ザ・ヒル

南知多の丘の上に、楽園のような風景が広がっている。

その場所は「花ひろば」。豊浜中心部から一・五キロほど離れた、半島脊梁部の傾斜地に季節ごとの花々を植えた屋外施設だ。夏のひまわり、冬から春の菜の花、秋のコスモス、そのほかスイセン、ペニチュア、ベゴニア、コキア、グラジオラスなど、一年を通じて何かの花が咲いている。その品種は二十種類以上。花の摘み取りや、季節によってはいちご狩り、メロン狩りもできるほか、旬の野菜の販売やエディブルフラワー（食用花）を取り入れたオリジナルスイーツも味わえる。

園内に入ると、その風景に誰もが目を見張り、息を飲むことだろう。目の前に広がるのは一面を埋め尽くす花々だ。取材で訪れた五月中旬はポピー、キンセンカ、ルピナス、金魚草などが盛りの時期で、白、赤、黄、橙、紫のカラフルな層が作られている。初夏のさわやかな丘の上には風が吹き抜け、陽光をいっぱいに浴びて花びらを開かせた花たちが心地よさげに揺れている。

高台にあるので見晴らしも最高だ。波のような起伏を見せる周囲の畑、それを囲むこんもりとした森、その向こうに広がる青い海や遠くの山並みが一望できる。訪れた人は、花ひろばの美しさもさることながら、周囲の景観の雄大さに気付くだろう。愛知県と思えないスケール感は、地元の我々にとっても新鮮だ。

そんな丘の上の風景は、どのようにしてできたのだろうか。

花ひろばを作ったベテラン農家

花ひろばが現在地にオープンしたのは平成十三年（二〇〇一）。すでに二十年近くも前のことである。園主である小笠原辰夫さんによると知名度が上がってきたのはここ十年以内のこと。「それこそ十年ほど前まではお客さんも少なかったのですが、スマホが普及するにつれ人気が広まっていった感触ですね」。なるほど、今風に言えば「インスタ映え」のスポットというところ。

実は小笠原さんは、現在地でオープンする前の平成五年から約八年間、すぐ近くの畑の片隅で小規模な観光農園を運営していた。しかしそちらは駐車場が確保できないうえ、畑が狭かったため今のような展開もままならず、さほど話題のスポットにはならなかったらしい。

小笠原さんが早い時期から観光農園に着目していたのには、次のような経緯があった。

小笠原さんは昭和十六年（一九四一）、碧南の生まれ。実家は代々の農家で、小笠原さんも若い頃から農業を志していた。昭和三十八年（一九六三）、二十二歳の時に農業実習生として渡米し、一年間カリフォルニア州の農場で研修した経験も持っている。このときの派遣先がカーネーション農家だったことが、花の栽培に触れた最初だった。

小笠原さんはもともと施設園芸をやりたかったので、帰国後は碧南でキュウリなどのハウス栽培に取り組むようになる。しかし、キュウリの生産に飽き足らず、少し違う形で農業に関連する事業ができないものか、との思いも抱いていた。しかしその時はまだ観光農園の発想はなく、キャベツと並行してストレリチア（極楽鳥花）の栽培を先駆的に始めたくらいだった。

長らく碧南を拠点にしてきた小笠原さんだったが、あるとき南知多とのつながりが生まれる。昭和後期から平成初期にかけて、南知多町の丘陵地で国の主導による大規模な農地開発事業が行われ、これによって造成された農地を借りることになったのだ。その機会に碧南から拠点を移し、南知多でキャベツ栽培を始めた。

こちらに来てみて実感したのは、南知多は観光地だということだ。このような地域なら観光と農業を結び付けた事業ができそうだ。そう考え、先述

した〝プレ〟花ひろばを始めたわけである。

現在も、花ひろばの運営と同時にキャベツやブロッコリーを栽培し、菜の花やガーベラなどと共にJAに出荷している。取材に訪れた時も、敷地内の一角のハウスではスタッフの皆さんがブロッコリーの出荷準備作業に勤しんでいた。花ひろばは、長年土と共に生きてきたベテラン現役農家によって運営されている施設なのである。

「開パ」を知っていますか?

小笠原さんが南知多に来るきっかけとなった「国が中心となった大規模な農地開拓事業」。これこそが、南知多の丘の上に今の風景をもたらした一大プロジェクトだ。

地元では、その事業で造成された土地をカイパと呼んでいる。書き文字で表すと「開パ」。これは「開拓パイロット事業」の略である。

開拓パイロット事業は、国が昭和三十年代から全国で推進した農地造成事業のこと。広い農地を作ることで農家の経営規模を拡大し、大型機械を導入して生産性を高め、経営安定を図ることを目的としている。パイロットは「試験的に行うもの。先行するもの」の意で、要するに「農地開発・農業経営のモデルとなる先駆的な取り組み」といったところである。

農地開発は地方自治体でも行われるが、国が主導するのは五百ヘクタールを超える広い面積のときで、愛知県で行われたのは南知多だけだった。正式には「国営農地開発事業 南知多地区」と呼び、昭和五十一年(一九七六)に着工、平成六年(一九九四)に完工した。

なぜ、南知多に国営事業の白羽の矢が立ったのか。

もともと知多半島先端付近の内陸部は、最高地点で標高一二〇メートル程度の起伏に富んだ丘陵地である。ところどころで小さな田畑が耕作されていたが、大部分は未開の森で、農家が多い割にほぼ有効利用されていない土地だった。

その理由は、地形的に耕作が難しかったことと水の便が悪かったためだが、水に関しては昭和三十六年(一六九一)に愛知用水が通水したことで解消された。また、昭和四十五年(一九七〇)には知多半島道路と南知多道路が開通し、輸送は格段に便利になった。気候温暖で土壌もよく、これらの恵まれた条件を最大限活用して果樹・野菜・酪農を総合的に担う農業地域を作ろうと、この事業が企図されたのである。

当初の計画では、南知多町と一部が美浜町にまたがる七五一ヘクタールの開発が計画されたが、農業を取り巻く状況や国の財政状況が厳しくなっていたこともあり、最終的には豊浜・山海・大井・師崎・豊丘(美浜町も含む)の五〇七ヘクタールとなった。開拓地は16のエリアに分けられ、各エリアは「〇〇団地」と呼ばれる。大きな建物がない農地を団地と呼ぶのはやや違和感があるが、計画的に造成された土地を意味する行政用語と考えていただきたい。ちなみに花ひろばの花畑があるのは「大城(おおしろ)・御用(ごよう)団地」のあたり。また、「豊浜西団地」にはJAの南知多営農センターと集荷場があり、南知多の農業基地になっている。

愛知用水以来のインパクト

この取材のために「開パ」を訪れたのは五月上旬から中旬にかけて。キャベツの収穫がほぼ終わりを迎え、入れ替わりにタマネギの収穫が始まろうとする季節だ。

開パのど真ん中、花ひろば近くの大城・御用団地の一角で、農家の堀江佐尚さんと待ち合わせた。その日はキャベツ収穫のほぼ最終日。農道に座り込んで話を聞いている間にも、堀江さんのもとで農作業に従事している皆さんがせっせとキャベツをトラックに積み込み続けている。

堪能してほしい絶景が南知多の丘の上にある。

開拓パイロットが南知多の農業を変えていった。

堀江さんは昭和十八年(一九四三)生まれで、生まれも育ちも豊浜の初神集落。昭和三十四年に高校を卒業してから農業一筋で、農地開発が始まる前から現在に至るまで、南知多の農業の変遷を見続けてきた。

「開拓前のこのあたりは、山の中に点々と畑があるくらい。作られていたのはサツマイモや小豆。キャベツも開拓前から作っていたけど、古くからキャベツを手掛けていたのは自分を含めてほんの一握りしかいなかったね」

国営開拓の話が持ち上がったのは、堀江さんが三十代前半だった頃だ。国営事業と言っても、事業費の一割は地元負担だし、農地の調達は地元の農家がすることになっていた。それぞれの地区で役員を決めて土地をまとめる作業をしていったが、多くの人の所有地が絡む事業なのでさぞ苦労されたことだろう。工事は団地単位で順次進められ、次第に農地が広がってゆくのを目の当たりにした。「愛知用水が来て、コックをひねるだけで水が出た時も驚いたけど、開パのときも驚いたね。こんなに広くなるなんて思わなかったから」と堀江さん。

とはいえ、当初は不安も大きかった。堀江さんは、比較的早い時期に完工した初神第三団地から開パでの農業を始めたのだが「地質的に石ころばかり。こんなところが畑になるのか心配でしたね」と振り返る。実際、土を起こしているときに機械がよく壊れたそうで、後には農機具メーカーが、南知多独特の硬質な土壌に合わせたトラクターのロータリーを製作したという。そんな難儀な土地も、土壌改良剤や堆肥を投入することで次第にこなれていった。

堀江さんが最初に植えたのはトウモロコシ。農業普及指導センターの指導で、土質に合うと言われたからだ。しかし開拓以前からキャベツを中心に生産したいという思いがあったので、土づくりができたと判断した時点で本格的なキャベツ生産に乗り出した。

南知多の野菜は発展途上

現在の開パで作付面積が最も広いのはキャベツである。次いで多いのがタマネギで、開パではやや遅れて生産が始まった。以下、馬鈴薯、枇杷、スイートコーン、大根、レタスなどが続く。また、商品作物ではないが飼料作物の割合も高い。これは牧草、つまり牛のエサだ。半田市の酪農家らで組織する南知多圃場利用組合が土地を借りて育生しているもので、いわば知多半島の酪農を開パが下支えしている形だ。逆に半田からは堆肥が供給されており、共存共栄の関係である。

堀江さんによると、南知多のキャベツは色の良さと甘味が特徴で、正月明けに出荷されるものは市場でも高評価だとか。「渥美半島のキャベツより美味いと思っているよ」とライバル産地を引き合いに出して胸を張る。

しかし、味とは裏腹に南知多産というブランドイメージは広まっていないように思う。その点を堀江さんに聞くと「理由のひとつは、キャベツもタマネギも加工用として契約栽培を中心にやっているからですね」との答え。

加工用というのは、弁当用や飲食店向けに使いやすいようカットされる野菜のこと。開拓時期が比較的遅かった南知多は後発の産地であり、すでに評価の固まっていた他産地には生産量も知名度も及ばない。そこで生き残りを図るため、他産地に先駆けて加工業者との契約栽培に乗り出したのである。加工用に特化したことで経営が安定したのは先見の明があったと言えるが、南知多産野菜の良さが世間にあまり浸透していない現状は少し惜しい気がする。「南知多はまだ発展途上の産地なので、これからはそういうことも考えていかないとね」。

そんな開パでは近年、余剰土地がなくなりつつあるという。実は当初、農地が開発されたのはいいものの生産者の減少が始まっていた時代状況もあり、空いたまま有効利用されてこなかった土地も随分あったという。しかし近年は新規就農者が増加傾向にあり、面積的にも土壌的にも流通面でも恵まれた南知多の農地が人気になったというのだ。これまで堀江さんは農業を始めようとする人の研修を何人も受け入れてきたが、周辺には借りられる土地がない。「目の届くところでやってくれるなら、彼らが独立したあとも丁寧にサポートできるんですけどね」。

こうした発展途上の産地ならではの課題にどう取り組んでいくのか、今後も見守っていきたい。

プラスチック・オン・ザ・ヒル

最後に、南知多の丘の上で特徴的な風景をもう一つ挙げておきたい。

それは「南知多プラスチック工業団地」だ。丘の上というか、小さな谷の一番奥という感じの場所で、花ひろばや南知多町総合体育館のやや真下に位置している。ここは開拓エリアの外で、整備されたのも開パより早い昭和五十二年(一九七七)である。

一般的な工業団地と異なるのは、団地名が示すとおり、プラスチック製品のメーカーだけが集まっている点だ。立地するのは十三社。そのすべてが地元豊浜出身者によって設立された会社とい

うのも興味深い。どのような経緯でこの団地ができたのだろうか。

豊浜でプラスチック製品の製造が始まったのは昭和三十八年頃。口火を切ったのは豊浜に何軒もあった鮮魚加工工場のひとつ。当時の豊浜では、夏にコウナゴやカタクチイワシの加工を、冬に干物製造を行っていたが、その合間の時期の仕事としてプラスチックの雑貨類を作り始めたのが始まりだった。その工場はやがて干物づくりから撤退しプラスチックに一本化。さらに他の加工工場も次々に続く。プラスチック産業は豊浜の新興地場産業として急速に発展し、次第に需要を伸ばしていった。

しかし同時に問題も生じていた。各会社はそれまで干物加工に使っていた建物を利用して製造していたのだが、どこも漁港周辺の住宅密集地にあり、しかも二十四時間態勢で操業していたため、騒音に対する苦情が出てきたのだ。さりとて、もともと家族経営の小規模な会社がすぐに新天地に移ることは難しい。そこで、同業者で組合を設立し、集団で移転することになったのである。全社の移転が完了したのは昭和五十五年（一九八〇）のこと。

現在稼働している企業の製品ラインナップは、バケツなどの家庭用雑貨、プリンなどの食品容器、薬品容器、自動車部品、園芸用の鉢やプランターなどバラエティに富む。主力のひとつである園芸用品の始まりは、西尾市あたりで栽培が盛んだった観葉植物用として開発されたものという。陶製の植木鉢よりも軽くて扱いが楽なことから普及し、現在はここで作られる製品が全国シェアの三、四割をも占めるという。近年では、トンネル工事や学校のグラウンドの工事で水抜きをするための資材を開発しヒットさせた会社もある。

惜しむらくは、こうしたプラスチック製品が南知多で作られていることも、おそらくあまり知られていないことだ。この地域には、まだまだ世に〝見つけられていない〟優れたものがたくさんある。南知多の丘を少し巡っただけで、そんなことに気付かされる。

かくも多彩な地場産業が南知多を支えてきた。

取材協力◎小笠原辰夫さん／堀江佐尚さん／花ひろば／あいち知多農業協同組合／あいち知多農業協同組合 南知多営農センター／南知多プラスチック工業団地協同組合／東海農政局農村振興部農地整備課
参考文献◎南知多町誌 本文編／愛知県開拓史 通史編